

煤けたビル群が残照を浴びて、路地に深い影を落とし始めていた。駅から少し離れたこの路地は、間もなくラッシュユアワーに差しかかる時間帯となるにもかかわらず、風のように人足が途絶えている。

そんな陰気な路地の一角で、渡辺の大学仲間である佐藤と小林が若い女に言い寄っていた。

「いいから付き合えよ」

女の退路を断つように立ち塞がりながら、小林が言う。

恐ろしく整った容姿をした女だった。困惑気味に眉根を寄せたその表情さえ美しく、たとえ西施の生まれ変わりと広言したとしても、異を唱える者は居ないように思える。

渡辺は慣れた手付きで煙草に火を点けると、紫煙を燻らせながら二人のする様を眺めた。

「止めて下さい！」

細い声が辺りに響くと、その絹のような髪に触れようとしていた佐藤は、一瞬動きを止めた。が、助けに駆け付ける者が居ないと分かると、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「黙って付いてくればいいんだよ！」

佐藤は荒々しく言い放つと、女の両腕を掴んで引きずり始めた。

声という最終手段すら封じられてしまった女は、か細い腕で懸命に抗っている。苦悶に満ちた表情から、怪しい色香が漂っていた。

これ以上は犯罪になってしまふということは明白だったが、渡辺は制止する気にならなかった。渡辺もまた、佐藤たちと同じように、この女の虜となっていたのである。

「やめろ！」

背後から聞こえた心臓を貫くような鋭い声に、女の淫らかな姿態を思い浮かべていた渡辺は、警策で打たれたかのような衝撃を受けた。

振り返ると一人の男が立っていた。渡辺はその全身黒ずくめの姿にぎよつとしたが、よく見るとトレーニングウェアのようだった。ランニング中だったらしく、男は首にかけたタオルで汗を拭いている。それほど背は高くないものの、体は引き締まっていて俊敏そうに見えた。

男は深く呼吸して息を整えると、

「嫌がつてるだろ。離してやれよ」

と、中腰のまま固まっている佐藤に向かって言った。

こちらに非があるのは佐藤も認識しているに違いないが、興奮度合いからして素直に謝れる精神状態ではなかったようだ。

「格好付けやがって、邪魔すんじゃねーよ！」

佐藤は大声で叫ぶなり、掴んでいた女の両腕を投げ捨てるかのように離し、大股で男に近付いていった。

「いいぞ、やっちなえ！」

その様子を見て、後ろから小林が煽る。怪しげな菓をやっていっているわけでもないのに、二人とも極度に興奮していた。

男は凄むでも怯えるでもなく、じっと佐藤を見つめ続けている。何故か分からないが、渡辺はその瞳に哀しげな光を見て取った。

「この野郎っ！」

その視線に居た堪れなくなったのか、佐藤は叫びながら男に殴りかかった。

それは、激流の中で喘いでいる小動物が、為す術もなく滝壺に呑まれていく様に似ていた。佐藤の拳が当たろうかという瞬間、男は急激に体を反転させながら懐に入り込んだ。目標物を失い前のめりになった佐藤の体は、何の抵抗も出来ずに男に担がれ、一瞬の内に地面に叩き付けられた。

渡辺の半開きになった口から、短くなった煙草がポロリと落ちる。申し合わせたように口を半開きにした小林が、眼球だけを動かしてこちらを見た。

佐藤は焼けた鉄の棒を背中に押し当てられているかのように、体を反らせずにた打ち回っていた。奇妙なダンスを踊っているかのようにも見えるその姿に、渡辺は強い恐怖心を抱いた。

呻いている佐藤を一瞥すると、男はこちらに向かって歩き出した。

小林はその動作で我に返ったらしく、ジーンズのポケットから小さなフォルディングナイフを取り出した。

平静からナイフを持ち歩いている小林だが、それは臆病な性格の裏返しである。刺す度胸などあるはずもなかったが、威嚇になると思っ取り出したのだろう。渡辺もそのナイフが十分な効果を果たすことを期待して、男の様子を窺った。

しかし、そんな渡辺たちの期待は見事に裏切られた。男は眉一つ動かさずに小林の方へ向き直ると、何一つ変わらぬ歩調で歩き出したのである。

狙い定めた獲物以外は目に入らない肉食獣のように、男は悠然と目の前を通り過ぎていく。今なら背中から組み付けるはずだったが、渡辺の足は竦んで動かなかった。

「何だよ、こいつ……」

小林が息を荒げながら、半泣き状態でナイフを振り回す。が、男は全く意に介さず、無造作に間合を詰めていく。

焦燥感が最大限に達したのか、小林は鳥類のような甲高い声をあげ、男に躍りかかった。

渡辺は思わず目を閉じた。

真つ暗な闇の中で、何か重い物が倒れる音がした。胸から血を流して倒れている男の姿を想像しながら、渡辺は恐る恐る目を開けた。

目の前の光景に、渡辺は度肝を抜かれた。そこには平然と立っている男の後

姿と、その足下にうつ伏せで倒れている小林の姿があったのである。

小林は劇薬を飲んで息絶えてしまったかのように、ピクリとも動かない。男は小林の持つていたナイフを手に取り、興味深げに眺めていた。

命の危険があったにもかかわらず、微塵の動揺も見せていない男の素振りに、渡辺は戦慄を覚えた。

男はナイフの刃をしまうと脇に投げ捨て、ゆっくりと振り返った。

先程までとは違い、渡辺の足の震えは止まっていたが、これは男に立ち向かう覚悟が出来たからではなかった。

あの女の持つ得体の知れない魅力が渡辺を狂わせていたが、佐藤と小林がやられたことにより、その呪縛から解き放たれたのである。

講義をサボることも多く、普段から悪ぶってはいたが、三人ともそこらに居るごく普通の大学生だった。あの女を一目見るまでは……。

贖罪の意味もこめて、渡辺は静かに男の制裁を待った。

男は渡辺の目の前までくると、ゆっくりと右拳を引いた。渡辺はきつく目を閉じた。

次の瞬間、鈍い衝撃が胸に伝わってきた。少し息が詰まったが、思っていたほどの苦しみではない。

「もうしないよな？」

これで終わりなのか、と怪訝そうに胸を押さえている渡辺に向かって、男は言った。

未遂とは言え、警察に通報された場合、三人は人生を踏み外す羽目になったかもしれない。これ以後、真面目に生きるということを条件に、男はチャンスを与えたようだった。

渡辺は何度も頷いた。

男は軽く頷くと、倒れている小林を抱き起こし、軽く頬を張った。小林は気を失っていたらしく、夢から醒めた様な表情でふらつきながら立ち上がった。

小林の状態を確認すると、男は座り込んだ状態で咳き込んでいる佐藤に近づいていった。そして、傍らに屈み込み、何やら声をかけながら、ゆっくりと佐藤の背中をさすった。投げられた恨みと体を労わってくれる優しさに板挟みとなったのか、佐藤は複雑そうな表情で時折頷いていた。

男は肩を貸して佐藤を立てさせてやると、渡辺に引き渡した。

このまま絶命するのでは、と思われた佐藤と小林だったが、意外なことに大した怪我はしていないようだ。

「せいせいでした」

渡辺は佐藤に肩を貸してやりながら、頭を下げた。佐藤と小林もそれに倣った。

早くいけと言わんばかりに、男が軽く手を振る。通りには少しずつ人足が戻り始めていた。

別人のように無口になった二人と肩を並べて歩きながら、渡辺は右手で胸を押さえた。殴られた箇所は、男の魂が残したかのような熱を持っている。

男が止めてくれなかったら、三人とも人の道を踏み外していたかもしれない。自分たちはあの男に救われたのだ、と渡辺は思った。

深い感謝の念が湧き起こり、渡辺はその場で振り返ると、もう一度、頭を下げた。